

あとがき

今回の展覧会はヤン・フォス JAN VOSS (1936～)の初期すなわち1961～63年の作品をドローイングを含め27点展示するものである。

この展覧会のカタログのテキストは谷川晃一さんにご寄稿いただき感謝している。谷川さんは画家であると同時にコンテンポラリー・アートについてもエッセーを多く発表されておられる方であるが、フォスとも親交があり、フォスの仕事を初期の作品から現在に至るまで丁寧にみておられる。フォスの解説者としては最適任者である。展覧会をご覧いただくとともにこのエッセーをお読みいただければ幸いである。

当画廊がフォスの初期の展覧会を開催する理由は、すでに2回、フォス展を開催しているが(1983年4月、1985年11月)、ともに新作展であり、私としてはこの作家の歴史を追って展示したい気持をもっていたからである。と同時に、フォスのアトリエで彼の初期の作品を見て、これは面白い、と思ったからである。この絵をみていると、ハングルクで生まれ、ミュンヘンの美術学校で勉強して、パリに出てきたばかりの青年画家フォスの心情がよくみえてくるのである。ユーモラスで、幾分コミカルにも感ぜられる物語がちりばめられた画面、そしてその色調はややダークの紫や緑の中間色で、決して明るい色ではない

が、しかしノーブルな感じなのである。特に私の心をとらえたのは、引っかいたような鋭い線で描かれた、デフォルムされた人物等のフォルムである。そこに、フォスの青春がみえてきて、私は大変楽しいのである。

フォスは1960年にパリに出て来たが、クリストはすでに1958年にパリに亡命して来ている。2人の若い作家にとって広いパリもすこぶる狭いのである。2人は出逢って、たちまち友人となり現在も親しい間柄である。そのパリ時代、2人は他の画家も加わり、同人雑誌を発行していたというから面白い。この話はフォス夫人から聞いた。

いつぞやクリスト宅を訪問した際、クリスト夫人ジャンヌ・クロードが、ウフフと笑いながら一枚のフォスの絵を私たちにみせてくれた。それはこの展覧会に展示している作品と同類の絵であった。ところが描かれている絵の内容がかなりきわどく、セクシイなのである。これにはアレレと驚き、ジャンヌ・クロードの笑いの意味も理解したのである。それにしてもフォスにはユーモアがある。

このフォスとクリストの両作家の展覧会を東京の私の画廊で交互に毎年開催しているというのも考えてみれば面白い因縁と言える。美術の世界は広いようで、狭いものだと、私はつくづく思うのである。

今回の展覧会のためにフォス夫妻が来日されないのは、残念であるが、私は近くパリに出掛ける予定なので、面会を楽しみにしている。遙かにフォス夫妻のご健勝を祈る。

1987年9月8日

佐谷画廊

佐谷和彦